
僕の世界が終わる日

春日小雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の世界が終わる日

【Nコード】

N6785G

【作者名】

春日小雪

【あらすじ】

僕はそこで、世界の破滅の音を聞いた。なんの疑いもなく永遠を信じていた僕たちは、延々と続く地下核シェルターに取り残された。僕らはきつと、破滅の一部でしかないのだ。そして僕が滅びるとき、僕の世界が終わる。

どこかで子供が泣いている。
反響したその声が聞こえる。
それはいつまでも止むことなく、暗闇の中をこだまする。

僕はゆっくりと目を開けた。
右頬に、コンクリートの冷たい感触。
薄汚れた床の上で、僕は体を丸めている。

もう、何日になるだろう。
考えてみたが、光の届かないこの場所では、時間の流れがわからない。
僕の感覚が正しいならば、ここに来てもうすぐ一ヶ月になるだろうかというところだ。

いつまでこの生活が続くのだろう。
ここに来るとき聞かされたのは、たいした騒ぎじゃないから一週間で出られるということだった。

もう、世界はダメなのかもしれない。

誰かが言っていた言葉が甦る。
世界はもう、終わってしまうのだ。
国のお偉いさんが勝手に始めた戦争で、上はもうメチャクチャになっ
てしまったのだ。

僕らの帰る場所など、とつくになくなっているのだ、と。
実際、地下深くにあるこの核シェルターにも、上の騒ぎが響いてくることがある。

僕らには、もう帰る場所はないのだ。

なのに、どうして僕らは地上に帰る日を待っているのだろう。

目の前にある、愛しい寝顔を眺める。

手を胸の前で重ね、安心しきった顔をしている。

僕はふっと優しく笑い、その頬を撫でた。

腐食した肌は、触るだけでボロリと崩れた。

いつの間にか、子供の声が止んでいた。

しかし、その声は耳の奥でまだ響いているようだった。

光だけでなく、音までも闇に飲まれたように感じる。

空間に、完全な沈黙が訪れた。

はつきりとしなない意識の中で、僕は上の様子を想像してみた。

しかし、たどり着く答えは破滅しかなかった。

僕は力無く笑った。

そしてもう一度、今度は崩さないように慎重に彼女の髪を撫でた。

彼女に触れる手の動きが重くなる。

視界がゆっくりと薄らいでいく。

僕は少しほっとしたような気持ちになった。
これで、一人ぼっちの彼女を抱きしめることができるのだから。
僕はゆっくりと目を閉じた。

- - - 世界の破滅の音がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6785g/>

僕の世界が終わる日

2011年1月15日02時30分発行